

## 大野市人口減少対策会議専門部会 ブランド部会 報告書

### 1 はじめに

ブランド部会では、検討テーマを『①道の駅「越前おおの 荒島の郷」を起点として回遊性を高める方策』、『②荒島の郷と道の駅「九頭竜」との連携により回遊性を高める方策』の2つに設定して、計4回の議論を行った。

荒島の郷については、過去2年のブランド部会でも回遊性を高める方策を検討してきたことから、過去の議論を活かしつつも事業の進捗や新たな見解も加味しながら、過去の提案を前進させることを意識して議論した。

また、道の駅九頭竜については、荒島の郷の開駅や中部縦貫自動車道の県内全線開通により入込減が懸念する声があることから、今回新たにテーマに加え、回遊性を高める方策について検討を行った。

さらに、議論を進めるうえで、市民が「観光で稼ぐ」ことを主眼におき、観光客の消費を拡大させ、地域経済の活性化に結び付けることを念頭に置きつつ、具体的方策の検討を行った。

本部会は行政内部だけの議論に終わらないよう、市のほか、中小企業診断士や金融業や商工業、観光業に携わる者で構成した。各々からの経験などに基づいた意見を踏まえ、この度、報告書としてまとめた。

#### <報告書中の用語の定義>

- 「荒島の郷」・・・ 道の駅「越前おおの 荒島の郷」
- 「両道の駅」・・・ 荒島の郷と道の駅九頭竜
- 「産直の会」・・・ 大野市道の駅産直の会
- 「道の駅」・・・ 両駅またはいずれかの駅に関する場合や一般的な道の駅を指す場合に使用
- 「地域」・・・ 両道の駅を除いた市内の各エリアを指す
- 「恐竜等」・・・ 恐竜と化石

## 2 論点整理

部会において「何を課題と捉えてこの提案に至ったか」という経緯や議論の流れを紹介することで提案内容への理解が深まるよう、以下に「論点」を整理する。

論点1	荒島の郷を起点として回遊性を高める方策
<p data-bbox="252 548 1334 584">■ <u>来訪者の行動段階ごとに提供する観光資源（ネタ）と情報発信の方法を考える</u></p> <ul data-bbox="261 647 1362 1391" style="list-style-type: none"><li>・「荒島の郷を起点として回遊性を高める方策」を検討する上で、単に、来訪者に荒島の郷から他の地点に移動してもらうことだけを「回遊」として捉えるのではなく、たとえば、その日のうちの回遊につながらなくとも、荒島の郷に休憩で立ち寄ってもらう、地域のことを知ってもらう、次に大野市に訪れた時に地域を訪れてもらうなど、これらすべてが回遊につながるものと捉え、将来に渡って回遊性を高めていく観点からその方策を考えることとした。</li><li>・荒島の郷に立ち寄った来訪者に地域へ回遊してもらうためには、そこで地域の情報を知ってもらい、地域に関心を持ってもらう必要がある。したがって、「①立ち寄ってもらう⇒②地域に関心を持ってもらう⇒③回遊してもらう」というように、来訪者の行動を3段階に分類し、各段階において、来訪者の満足度を高めるような取り組みを展開することが、最終的な回遊につながるものと考え、提案につなげた。</li><li>・来訪者の満足度を高めるためには、土産品や体験メニュー、観光スポットなどの魅力的な観光資源（ネタ）が、荒島の郷や地域に存在していることが求められ、さらには、そのネタを効果的に情報発信することが必要とされる。行動段階ごとに訴求力のある観光資源（ネタ）とその情報発信の方法について提案する。</li></ul>	

論点2	荒島の郷と道の駅九頭竜との連携により回遊性を高める方策
<ul data-bbox="261 1619 1362 2027" style="list-style-type: none"><li>・荒島の郷から地域に回遊してもらうなかで、いかに道の駅九頭竜との関連性を持たせるようにするかについて検討した。</li><li>・道の駅九頭竜にとって、荒島の郷開駅や中部縦貫自動車道の県内全線開通は、誘客のチャンスである一方で、「地域に魅力がなければ素通りされる」ことが懸念されるため、誘客強化を図ることは喫緊の課題である。</li><li>・また、九頭竜エリアには、化石、九頭竜湖、キャンプ場、スキー場など、魅力ある観光資源が点在しているものの、これらを十分に活用して、つなぎ合わせた取り組みができていないことを課題と捉えて、その解決に向けて検討を行った。</li></ul>	

### 3 提案内容

前述の論点を基に、具体的方策について議論を深め、提案としてまとめた。

<b>提案 1</b>	<b>荒島の郷に立ち寄ってもらうための方策</b>
-------------	---------------------------

- ・ 来訪者が道の駅に立ち寄る場合、運転中にたまたま見かけて立ち寄る場合と、事前に調べて行程の一つとして立ち寄る場合が想定されるが、ここでは、後者の来訪者を呼び込むための方策を提案する。

#### ■ 提供する観光資源（ネタ）

##### (1) 農林産物、地場産品など「食」を活かした商品開発を進める

- ・ 荒島の郷は、産直の会による農林産物や地場産品などの直売所や、大野産食材などを使用した飲食コーナーにより、大野の多彩で魅力ある「食」を観光客に提供する機能を備えている。これらの食を活かして商品の魅力を高めながら、品数を増やしていくことが求められる。
- ・ 市では専門家派遣制度や補助制度により、産直の会が行う商品開発を支援しており、現在、米や里芋など農林産物を原材料とした商品づくりが着実に進められている。引き続き、これらの支援を行いながら、大野の農林産物や地場産品のブランドを高め、「食」を買いに求めて訪れる来訪者を増やす取り組みが必要である。

##### (2) 「恐竜・化石」を活かした商品開発を進める

- ・ 農林産物や地場産品などを活かした商品開発を進めることは必須であるが、ここでは、新たな要素として「恐竜・化石（以下「恐竜等」という。）」を活かした商品開発の可能性について示す。
- ・ 福井県のキラコンテンツの一つである「恐竜博物館」は、令和元年度の年間来館者が約 126 万人であり、中京、関西方面を中心に全国から多数の観光客が訪れている施設である。
- ・ 令和 3 年 7 月には映画「ジェラシックワールド」の新作が公開される予定であり、これに関連付けた企画が行われることが予想される。また、近い将来には大規模な増改築が行われることもあり、今後、同博物館の入込数は増加していくことが予想される。
- ・ また、自動車の中京方面から恐竜博物館に向かう場合、中部縦貫自動車道の勝山 I C で下車するよりも、大野 I C で下車する方が距離的に近くなるという事実がある。
- ・ このアクセス面の優位性も上手く発信しながら、これらの恐竜博物館ファンを荒島の郷に取り込むためには、「大野ならではの恐竜等を活かした土産品」を開発し、販売す

ることで、新たな大きな消費につながる事が期待できる。

- ・中京方面からの恐竜博物館の来訪者が、恐竜等の土産品が荒島の郷でも買えることを知っていれば、帰りに立ち寄ろうという動機付けになる。
- ・荒島の郷の施設内には土産品の販売スペースを設けており、恐竜等の商品コーナーの設置についても検討されている。道の駅九頭竜についても、アンモナイト等の貴重な化石が発見された九頭竜エリアとしての強みがあることから、両道の駅ともに恐竜等の土産品の開発、販売により事業者が稼ぐことができる土台はできている。
- ・現在でも、市内で恐竜等の土産品は一定数販売されているが、今後は品数を増やして充実させることが求められる。事業者には、恐竜は福井県の共通のブランドであることや恐竜等で稼ぐことができる好機が訪れていることを認識してもらう必要がある。
- ・産直の会では、米や里芋などの農林産物を中心とした商品づくりが進められている。今後の展開として、専門家派遣制度や補助制度によって恐竜等土産の開発を促していくことや、恐竜等土産を開発できそうな事業者に直に働きかけること等が求められる。

## ■ 情報発信の方法

### (1) 「映える写真素材」を充実させ、インターネットによる情報発信を強化する

- ・事前に道の駅の情報を調べてから訪れる来訪者に対しては、WEB サイトや SNS、WEB 広告などのインターネットにより情報発信を行うことが効果的である。
- ・指定管理者が運営する荒島の郷の WEB サイトだけでなく、市や観光協会、産直の会など様々な関係団体の WEB サイトや SNS で情報発信を行うことが求められる。
- ・その中で荒島の郷で販売している農林産物や地場産品、食メニューなどを紹介することは必須であるが、施設内の紹介だけではなく、市内に点在する観光地等の情報と一体的に発信することが重要であり、これらの観光地等の魅力を十分に伝えることができなければ、回遊させることは難しく、立ち寄り先からも外れてしまう可能性がある。
- ・さらには、WEB サイトや SNS に掲載する内容は、訴求力や話題性、拡散性を生むためにも高いデザイン性が求められる。掲載する写真素材は、アングルやクオリティにこだわるだけではなく、他の観光地よりも興味を惹かれるように編集技術も必要になってくる。
- ・市では、近年、星空ハンモックや星降るランタンナイト、武家屋敷旧田村家の風車、御清水のカラフル提灯のライトアップのような「映える大野」を打ち出した仕掛けを行っている。この仕掛けとともに、「見ると出かけたくなる」ようなフォトジェニックな写真素材が増えてきているものの、市全域の各観光スポットでそのような写真が揃っているかというところではない状況である。

- ・市では、荒島の郷開駅、中部縦貫自動車の県内全線開通による誘客の好機に向けて、観光スポットごとに、または季節ごとに、「映える大野」を表現したクオリティの高い写真素材を充実することが必要である。
- ・撮影した写真素材を、関係団体のWEBサイトやSNS、WEB広告に活用し、ターゲットに応じて情報発信を行うことで、大野市自体が旅行の目的地として選ばれることが期待できる。

## **(2)ふるさと専用納税サイトに「荒島の郷オリジナル商品」を登録して情報発信する**

- ・WEBサイトによる情報発信として活用できるものとして「ふるさと納税専用サイト」がある。現在、41の事業者が、270の返礼品を本サイトに登録し、大野市のPRと自社商品の販路拡大につなげている。
- ・荒島の郷にしか売っていない土産品や施設内で体験できるメニューを開発することが前提となるが、これらを返礼品に登録してサイト上で情報発信することで、荒島の郷のPRにつながる。
- ・その場合、出店者が個々にオリジナル商品を登録するよりも、例えば、各出店者の商品の詰め合わせた「まるごとセット」や、毎月異なる商品が送られてくる「定期便」のようにパッケージングされたオリジナル商品を登録する方が寄付者への訴求力が高まる。
- ・市は、出店者による荒島の郷オリジナル商品が開発された際には、指定管理者や出店者にふるさと納税への登録を働きかけて、同サイトで荒島の郷とそこで販売されている商品を一体的に情報発信することが求められる。

### **提案2 荒島の郷で地域に関心を持ってもらうための方策**

#### **■ 提供する観光資源（ネタ）**

#### **(1) 施設内の体験メニューを充実させるとともに、地域の体験メニューを案内する**

- ・体験や経験に価値を見出す「コト消費」を求める観光客が増えてきており、荒島の郷にはカヌー池やクライミングピナクル、レンタサイクルなどの機能が備わる予定であり、アクティビティを求めるニーズに合った打ってつけの施設である。
- ・指定管理者や株式会社モンベル、体験事業者、市が連携し、施設内や敷地内で楽しめる体験メニューを充実させることが地域の情報を知ってもらうことにつながり、消費の拡大も期待できる。市は、これら体験メニューを開発、提供する事業者への支援を行うとともに、体験メニューのPRを実施する。

- ・また、例えば、荒島の郷のカヌー体験に興味を持った人には、九頭竜湖でのカヌー体験を案内するというように、施設の体験メニューと地域の体験メニューを関連付ける取り組みも重要である。
- ・指定管理者は、観光案内所において、市内で楽しめる体験メニューの紹介を行うとともに、興味を持った人には、その場で予約できるよう予約サイト（「じゃらん」など）を案内するなど、申し込みしやすい環境を整える。例えば、荒島の郷来訪者には何らかのインセンティブ（体験クーポンなど）を付与することなどで、一層の回遊が期待できる。

## ■ 情報発信の方法

### (1) 土産品や食メニューの売れ筋ランキング、口コミなどの情報を分かりやすく掲示する

- ・来訪者の消費意欲を喚起するためには、来訪者の目線に立って、店頭において土産品や食メニューの魅力を分かりやすく発信することが大切である。
- ・その方法の一つとして、土産品や食メニューの売れ筋ランキング、消費者の口コミをPOPに掲示したり、ホワイトボードに書き出したりするという方法が挙げられる。
- ・来訪者は、信頼性の高い情報をその場で入手できるため、消費喚起につながり、出店者としても成果が見えることでモチベーションの向上につながり、切磋琢磨することで商品の品質の向上にもつながる。
- ・WEBサイトにも売れ筋情報を掲載することで、直接、出店者の本店に買いに行くことも期待でき、新たな回遊性が生まれることにもつながる。
- ・指定管理者は、売れ筋の商品を広告等により掲示することを検討しており、市は実施に向けての助言や提案を行うことが求められる。

## 提案3 荒島の郷から地域へ回遊してもらうための方策

### ■ 提供する観光資源（ネタ）

#### (1) 地域の体験メニューを充実させるとともに、当日申込可能なメニューの開発を進める

- ・地域の体験メニューに魅力がなければ、荒島の郷からの回遊にはつながらない。市では補助制度や大手旅行会社との連携により、事業者の体験メニュー開発への支援を行っている。引き続き、このような支援を行い、地域で楽しめる体験メニューを量、質ともに充実させることが必要である。
- ・荒島の郷から来訪者をその日のうちに、地域の体験メニューに回遊させる場合、そのメニューが、当日申込が可能である必要がある。現在、市が展開している体験メニ

ーは事前予約制のものが多いため、当日申込が可能な体験メニューや当日申込が可能な日がある体験メニューを作ることで、事業者にとっても選ばれるチャンスになる。

- ・多くの事業者は本業を持っており、体験メニューを運営することで費用対効果を得られるのか考えなければならないが、例えば、観光協会の「レンタルパラソルいとりどり」事業（カラフルな傘を有料で貸し出し、まちなか散策を楽しんでもらう取り組み）のように、まち歩きに少しのアクセントを加えて、手をかけずに自由に楽しんでもらうような体験メニューの提供の仕方もある。「映える体験」となり、SNSによる情報発信も期待できる。市は、体験事業者を支援するなかで、このような視点や運営上のコツを助言、提案していくことが求められる。

## ■ 情報発信の方法

### (1) 来訪者の時間的余裕に対応したモデルコースのパッケージ化を行う

- ・荒島の郷の来訪者をその日のうちに地域へ回遊させる場合、そこで得た情報で地域の観光地に興味を持ったとしても、その観光地等を訪れるための「時間的な余裕」がなければ行動に移すことは考えにくい。
- ・荒島の郷から観光地等までの情報提供を行う際に、現地までの「距離」だけでなく、車での「移動時間」や「その場所で費やす時間」を個々に示して情報を提供することが重要である。
- ・道の駅に訪れる人の多くは他に目的地を持っていることが想定されるため、巡るのに長時間かかるモデルコースだけでなく、「短時間（30分～2時間程度）」のモデルコースを多数揃えておくことが有効であり、さらに季節ごとやテーマ（自然系、歴史系など）ごとにパッケージ化されていると訴求力がより一層高まる。
- ・これらの情報を、観光案内人やデジタルサイネージ、QRコードにより案内したり、チラシやカードを目につきやすい形で陳列したりすることで、来訪者の利便性が高まり、回遊につながることを期待できる。市は、指定管理者と調整を行い、このような環境を整えていく。
- ・なお、観光協会ではWEBサイトにより、荒島の郷から観光地等への紹介（所要時間や施設内容等）を兼ねた季節ごとの観光情報を作成する予定であり、この情報を荒島の郷の広報媒体に活用することで業務の効率化が図られる。

## 提案 4 道の駅九頭竜と荒島の郷の連携による回遊について

### ■ 提供する観光資源（ネタ）

#### (1)国道 158 号を九頭竜の観光資源が凝縮された「ドライブルート」として PR する

- ・荒島の郷開駅や中部縦貫自動車道の県内全線開通により、道の駅九頭竜が素通りされないためには、ドライバーに下道となる国道 158 号を走行してもらう必要がある。
- ・国道 158 号の蕨生からの東市布の区間には、九頭竜峡、仏御前の滝、魚止、ハナモモ、九頭竜ダム、総社穴馬神社、夢のかけはしなど自然豊かな美しい景観や歴史・文化が点在しており、現在も、ドライバーやバイカーに親しまれている。今後は、ドライブルートとしてこの区間の価値を高めて、PR することで道の駅九頭竜の誘客につながる。
- ・例えば、自然の魅力を前面に打ち出した「福井県最高の山間ドライブルート」「高速道路では見ることができない秘境ルート」という切り口や、各スポットにまつわるストーリーをつなぎ合わせた「九頭竜の伝説が詰まったドラゴンルート」というような切り口での展開方法が挙げられる。
- ・提案 3 で示した、来訪者の時間的余裕に対応したモデルコースの一つとして、このドライブコースを荒島の郷の観光案内所や WEB サイトなどで情報発信する。

#### (2)両道の駅と HOROSSA に「恐竜映え」するフォトスポットを作る

- ・道の駅九頭竜と荒島の郷を「共通」の観光資源で関連付けて回遊を高める場合、前述した「恐竜・化石を活用した土産品の開発」のように、恐竜博物館から誘客する観点から、恐竜等コンテンツを活かすことが有効な方策として挙げられる。
- ・恐竜等の土産品だけではなく、視覚的にも人を引き付ける仕掛けが必要である。両道の駅に、恐竜博士ベンチのような新たな「フォトスポット」を作り、関連性を持たせたキャンペーン企画を行うことにより、両道の駅を巡ろうという動機にもつながる。
- ・あわせて、化石発掘体験センターHOROSSA! の中にも、恐竜モニュメントのようなフォトスポットを新たに作ることで体験者の満足度を高めるとともに、そこを起点とした両道の駅への回遊も期待できる。
- ・いかに恐竜博物館との差別化を図り、大野の特性を活かしたデザインにするか検討が必要となる。
- ・道の駅での恐竜等の土産品が開発された場合には、このスポットで土産品を持って写真を撮るといった「恐竜映え」する構図が生まれ、来訪者の SNS による情報発信と土産品の消費拡大の相乗効果が期待できる。

## ■ 情報発信の方法

### (1) 「映える写真素材」を充実させ、インターネットによる情報発信を強化する（再掲）

- ・九頭竜湖、紅葉、冬景色など、九頭竜エリアの自然豊かな景観は、撮影や編集の技術次第で、色鮮やかな「絶景」として表現できる可能性を持っており、映える写真素材を充実していくなかでも特に力を入れるべきエリアである。
- ・前述のドライブルートはPRするうえでも、興味を持ってもらえるよう写真素材の質の高さが求められ、WEBサイトやSNS、WEB広告により、ターゲットに応じて情報発信を行うことで、大野市が旅行の目的地として選ばれる可能性が高まる。

## 4 検討経緯・部会員

### (1) 検討経緯

回	開催日	内容
第1回	9月14日	過去2年の議論の経緯と今年度の方向性を確認。両道の駅の回遊性を高めるためのアイデア出し
第2回	10月2日	アイデアを実行する上での意義や課題について整理
第3回	10月16日	報告書（骨子案）の確認、議論
第4回	10月27日	報告書（最終案）の確認、議論

### (2) 部会員

所属・役	氏名	備考	
合同会社プラスアルファ・ラボラトリー 所長	川嶋 正己	コーディネーター	
越前信用金庫 常勤理事	佐々木 成充	金融関係	
大野観光自動車株式会社	杉本 亜依	観光・交通関係	
大野商工会議所	高田 龍佳	商工関係	
一般社団法人大野市観光協会	鷲尾 貴志	観光関係	
大野市産経建設部道の駅推進課 課長補佐	五十川 秀育	行政・道の駅関係	
大野市産経建設部商工観光振興課観光振興室 室長	大久保 克紀	行政・観光関係	
(事務局)	課長補佐	澤田 陽彦	
大野市企画総務部政策局総合政策課	主査	小野田 陽	